

分断ではなく架橋へ

——何らかの「困りごと」をもつ学生と何らかの「困りごと」をもつ教員支援の未来——

大谷 いづみ

(立命館大学産業社会学部/生存学研究所)

文字通訳の画面をクリックして見ていただければと思います。いろいろ考えて、今日のタイトルを「分断ではなく架橋へ」、副題を「何らかの「困りごと」をもつ学生と何らかの「困りごと」をもつ教員支援の未来」としました。これまでのお話は、主に障害学生支援のお話を中心でした。わたし自身、かつては障害学生であり、現在をふくめ長く障害を持つ教師という立場でもあるお話をしてみたいと思います。

■見える障害／見えない障害

「障害」には、たとえば車いすや白杖のように、見える「障害」があります。他方で、一部の内部疾患のように外からは見えない「障害」があります。あるいは、慢性疼痛や慢性疲労症候群などのように、当事者はとても辛いにもかかわらず、疾病との診断がつきにくい、あるいはについても理解されにくい「障害」があります。

わたしは乳児期に罹患したポリオ・サバイバーで物心ついた頃から両下肢障害をもっていました。さらに2012年、転倒骨折で両足を骨折して障害が重度化し、車いすを常時使用するようになりました。これらはいずれも明らかな「見える障害」です。他方で、ポリオ罹患者は、「普通」を知らず、いわば24時間100メートル全力疾走している状態がデフォルトで育つので、始終慢性的な疲労をかかえていても、そもそもそれを自覚しません。「みんな」「疲れた」というし、こんなもんだ、と、自らの慢性疲労を過小評価します。また、少なくともわたしの場合は、「特別扱い」をされることがとても多かっただけに、それが嫌で無理をかさねた結果、取り返しのつかない事故になってはじめて、無理していたことに気付いたような状況でした。にもかかわらず、元気な振りをすることはデフォルトで身につけているので、慢性疲労は外からは、「見えない／見えにくい」側面です。ポリオ・サバイバーには、慢性的に激痛のある人もいますが、ポリオ特有の頑張り気質というか、それを外には見せないで頑張ってしまうので、慢性的な痛みもやはり外からは見

えない／見えにくいようです。

他の事例をみてみたいと思います。知覚過敏があるとか、情報の処理が不得手な「発達障害」等の学生は、保護者からも教員からも理解されにくいだけでなく、時には、だらしがないとか、さぼっている困った学生としてラベリングされてしまう場合が多々あります。

先ほどお話いただいた、シン・ジュヒョンさんのように日本語を母語としない留学生は、言葉の壁という、見えない「障害」をもった学生といえるかもしれません。コロナ禍がはじまって大学事務も役所もテレワークが中心となり、ビザの件で双方とメールのやりとりをしていた留学生たちが、ささいなことで行き違いになるとか、メールでのやりとりで自分の言語能力に自信を失って無力感を感じているようすが、あちこちで報じられました。そもそも、ビザが取得できず国境という「見える壁」にいまなお阻まれている留学生もたくさんいます。

ヤング・ケアラーは、自分の疾病・疾患ではなく、家族の疾病や障害のケアにあたるために、学業や交友関係に支障がおきている子どもたち・学生たちで、ごく最近、その存在が急速に一般にも知られるようになりました。

■コロナ禍による授業のオンライン化が あぶり出したもの

コロナ禍は、これら、なんらかの困りごとをかかえた学生の、見えにくい「壁」をあぶり出すことになりました。見える障害学生固有の課題が多々あり、その支援を充実していくことはもちろん重要ですが、見えない／見えにくい「障害」学生の存在、障害学生支援室や学生サポートルームにたどりついていない学生の「困りごと」に対応していく、掘り起こしていく、そういうことも急務の課題です。

他方で、授業のオンライン化は、これら、「見える障害」、「見えない障害」の別を超えて、なんらかの困りごとをかかえた「障害」学生が、他の「普通」の学生とおなじ地平にたつことになった側面があるかもしれませ

ん。これまでのオンライン・セミナーで、ITを駆使しているある障害学生が、「時代がやっとならしたちに追いついてきた」と発言されたことがとても印象に残っています。また、授業のオンライン化で、録画された動画をくりかえし見てやる気を出し、急速に成果をあげた学生や、見えにくい困りごとが理解されなかったり嘘をついたりしていると思われて低迷していた状況が変化し、飛躍的に成績を上げた学生もいます。

けれども、同時に、忘れてはならないのは、授業のオンライン化は、行う側の教員に、膨大な負担となっているという、まぎれもない「現実」があることです。これまでの対面の時と同じように教育の質を担保し、学生を育てようという責任感のあるまじめな教員であればあるほど、その負担が強く感じられていることでしょう。その負担ゆえに、場合によっては、見えにくい困りごとを抱えた「障害」学生が、サボっていたり、嘘をついているように見えるかもしれません。実際にそういう学生がいることもまた、まぎれもない「現実」としてあります。

ふたたびわたくしごとになりますが、わたしは、1960年のポリオ、1970年の香港カゼ、2009-10年に流行った新型インフルエンザと、日本で戦後起きた大きな感染症に罹患・発症していて、感染症に対して脆弱な経歴があります。モデルナワクチンの副反応もひどく、一時は感染がうたがわれるような状態でした。ちょうど第三波の医療崩壊が起きていた時期で、折悪しく、週4回きいただいているヘルパーさんが剥離骨折で自宅療養になってしまった。介護崩壊リスクの負担がヘルパーさんにこういう形で顕れているわけで、とても代わりのヘルパーさんにきていただくことは言いだせません。私よりもっと大変な状況でヘルパーさんの介助を必要としている人たちがいることはわかりきっていますから。ところが、日常的に訪問介護をうけて日常生活を維持していても、たとえ感染しても、ひとり暮らしは家庭内感染も施設内感染もないので、入院はおろか療養型施設にも移送してもらえない、という京都のリアルを、訪問介護の理事長さんから教えていただき、愕然として不安な日々を送りました。コロナでみんな大変、だけれども、みんな等しく大変、なわけではないのです。災害弱者は医療災害にも弱者だからです。もちろん、訪問介護にきてくださるヘルパーさんのおかれている厳しい状況もリアルに見えて来ます。

幸い、感染することなく、あるいは、ひょっとしたら感染していたかもしれませんが、目立った後遺症もなく、回復はしました。そして、ようやく回復して、ヘルパー

さんにはまかせられない用事ではじめて外出した昼ひなか、四条にむかいながら、だんだん人出が増えてくるのを見てパニックになり、途中で引き返しました。そのときのわたしの不安は、ブレイクスルー感染に対しての不安だったのか、それとも、ハイリスクのため、授業をオンラインにしたり、ほかのさまざまな業務を免除していただいているにもかかわらず、繁華街にむかって電動自転車椅子を走らせている姿を見た「誰か」に、「これだけ特別な「配慮」をしているのに、みんな大変なのに、四条をうろついていた」と批判されることへの不安なのか、判別がつかせませんでした。その不安は今でも、同じような気がします。そして、これは、見えない「障害」をかかえて、それが理解されない無力感をもつ学生たちの不安にも通じるものだと思うのです。

■「困りごとを抱えた学生」と 「困りごとを抱えた教員」を架橋する

見える障害・見えにくい障害をもって生きてきた経験を持つ障害のある教員が働く職場は、まだまだ圧倒的に、障害のない教員が働く職場です。必ずしも障害学生支援が仕事ではありませんし、そうであるべきだとも思いません。そしてそこには、介護や育児など何らかの困りごとを抱えて頑張っている教員の姿も見えます。自分の経験から、見えにくい障害をもっている学生もまた、見えやすい。今の私には両方が見えてしまうので、引き裂かれて股割き状態になっているという感覚が、ずっと拭き取っていません。

共催とさせていただいた、「困りごとを抱えた学生と教員を架橋するプラットフォームの構築:Post コロナ社会における高等教育のハイブリッド化による「障害学生」支援の未来」の「困りごとを抱えた」は、学生と教員の双方に架けた言葉です。「障害」はグラデーションがあります。これまで、さまざまな「障害」によって高等教育から排除されてきた「障害」学生にも「障害」教員にも道を拓くことを考えたい。

現状のように、その負担を現場の個々の教員や一部の理解ある教員、職員の方々に負荷をかけるのでは、分断が増すだけです。そうならないような方途をさがしたい。コロナ禍の初期に、見えないウイルスが見える差別を引き起こしたように、現在のように、教員に、負荷を強いことを続けてはなりませんし、まちがっても、キャンパスに自衛警察につながるような状況をうみだしてはなりません。

今日のオンライン事務局の話は、バックヤードの作業がどれほど大変だったかと、もしそれだけを見ていただくことになったのだとしたら、このイベントを企画した目的からは離れていきます。大変だけれども、それぞれ何か別の解決に向けて、解決方法を探す方向に、今日のイベントが炙りだした課題について、それをどうしたらいいか、いっしょに考えていければよいと考えています。

わたしが今、考えていることのひとつは、きちんと資源を投入し、使いやすくすることです。たとえばオンライン化やハイブリット化をしていった時、TA や ES を複数配置し、学期途中からでも複雑な手続きなしに配置できるようにする。少なくとも運用で工夫できるところは工夫する。「土曜講座」のパートで川端さんが指摘されたように、「困りごと」を言い出せる、安心できる語りの場を保障することも重要です。そこから「見えない／見えにくい困りごと」を抱える人の声を聴き取ることができるからです。

ご静聴ありがとうございました。この後、みなさまといっしょに考えていくことができればと思います。

付記：本稿は、2021年11月20日に行われたオンライン・セミナー「情報保障のいまとこれから——生存学研究所の取り組み」の講演に加筆修正したものである。

